

急性・重症患者看護専門看護師勉強会活動報告

大 野 美 香（独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター）
 丸 谷 幸 子（名古屋市立大学病院）
 竹 中 利 美（半田市立半田病院）
 小 島 朗（名古屋大学医学部附属病院）
 鳶 田 理 佳（名古屋市立大学看護学部）
 明 石 恵 子（名古屋市立大学看護学部）

I. はじめに

名古屋市立大学大学院看護学研究科（以下、本学）では、2007年度にクリティカルケア看護専門看護師教育コースが設置され、急性・重症患者看護専門看護師の教育が開始された。これまでに5名の学生がコースを修了し、うち4名が急性・重症患者看護専門看護師の認定を受け、所属施設で活動している（2013年1月現在：表1）。急性・重症患者看護専門看護師勉強会（以下、勉強会）は、本学専門看護師教育コース修了者のフォローアップを趣旨として2010年5月から開催されている。本稿では、その活動と今後の課題を報告する。

II. 急性・重症患者看護専門看護師とは

専門看護師（Certified Nurse Specialist：CNS）は、ある特定の専門看護分野において卓越した看護実践能力を有することを認められた者であり、実践、相談、調整、倫理調整、教育、研究という6つの役割が期待されている。そして、急性・重症患者看護専門看護師は、緊急度や重症度の高い患者に対して集中的な看護を提供し、患者本人とその家族の支援、医療スタッフ間の調整などを行い、最善の医療が提供されるよう支援する看護師である。このような専門看護師になるためには、日本看護系大学協議会が定める看護系大学院修士課程の専門看護師

教育課程に入学し、所定のCNS共通科目および専門看護分野別に定められた必須単位（実習を含む）を履修しなければならない。専門看護師教育課程修了後は、6ヶ月以上の看護実務研修期間を経て専門看護師認定審査を受ける。専門看護師認定審査は看護実務研修中の看護実績報告と筆記試験で構成されている。専門看護師認定審査に合格すると、専門看護師として日本看護協会から認定される。

III. CNS勉強会の目的

CNS勉強会は本学専門看護師教育コース修了生のフォローアップを趣旨として開始された。その主な目的は認定審査対策としての事例検討である。また、勉強会開始当初の急性・重症患者看護専門看護師は全国でわずか42名であり、東海地方には一人もいなかった。そのため、他大学の修了者も含めた専門看護師を目指す者同士の自己研鑽や情報交換の場とし、ネットワークを形成するという意図もあった。

IV. CNS勉強会参加者と専門看護師認定審査合格状況

CNS勉強会は、①本学クリティカルケア看護専門看護師教育コース修了者（以下、本学修了者）、②他大学で急性・重症患者看護専門看護師の教育を受けた者（以下、他大学修了者）、③急性・重症患者看護専門看護師、④他分野の専門看護師、⑤本学クリティカルケア看護専門看護師教育コース在学2年目以上の学生（以下、在学生）、⑥本学クリティカルケア看護学領域の教員（以下、教員）で構成されている。⑤の在学生を2年目以上の学生とした理由は、在学1年目の学生は専門看護師への志向性は高いものの、専門看護師としての役割や機能についての理解が浅いからである。この勉強会では、クリティカルケア看護領域の複雑な問題をもつ事例に対する看護

表1 名古屋市立大学看護学研究科専門看護師教育コース入学・修了状況

（2013年1月現在）

	入学者数	修了者数	専門看護師認定審査合格者数
2007年度	1		
2008年度	1		
2009年度	3	1	
2010年度	3	3	1（2007年度入学生）
2011年度	3	1	2（2008年度・2009年度入学生）
2012年度	3	2（予定）	1（2009年度入学生）
合計	14	7	4

実践、組織のシステムや文化を視野に入れた調整や倫理調整などが議論される。そのため、専門看護師として必要な基礎的事項を学修し、専門看護師コースの実習を経験している2年目以上の学生をメンバーとした。

2010年度の勉強会開始時の構成メンバーは、本学修了者1名と他大学修了者1名の合計2名の専門看護師候補生、在学生4名、教員1名の合計7名であった。モデルとなる専門看護師が身近におらず、手探りと言ってもよい状況で月1回の勉強会が始まった。そのようななか、在学生が実習施設で慢性疾患看護専門看護師の指導を受ける機会があった。慢性疾患患者が急性増悪のために救急搬送され、集中ケアを受けることは少なくない。クリティカルケア看護領域と慢性疾患看護領域の看護師が連携して関わる事例も多く、その専門看護師から学ぶことが多かった。他分野の専門看護師との議論は有意義であり、専門看護師のロールモデルにもなり得る。そのため、慢性疾患看護専門看護師に勉強会への参加を依頼しメンバーが8名となった。さらに、2011年度には在学生3名と他大学修了者1名、2012年度には在学生1名、本学博士後期課程に入学した急性・重症患者看護専門看護師1名、教員1名が加わり、構成メンバーは15名となった(表2)。しかし、勤務の都合や個人的な事情などで勉強会への参加が難しいメンバーもあり、毎回の出席者は8～10名である。

そして、勉強会を開始して3年が過ぎようとしている2013年1月現在、勉強会に参加した専門看護師候補生7名中6名(本学修了者4名、他大学修了者2名)が急性・重症患者看護専門看護師認定審査を受け、6名とも合格という成果を出している。

表2 CNS勉強会の参加者と
専門看護師認定審査合格状況

	2010年度	2011年度	2012年度
①本学修了者	1	3	2
②他大学修了者	1	1	1
③急性・重症患者看護CNS	0	2	5*
④他分野CNS	1	1	1
⑤在学生	4	4	4
⑥教員	1	1	2
合計	8	12	15
認定審査受験者数	2	2	2
認定審査合格者数	2	2	2

①本学クリティカルケア看護専門看護師教育コース修了者
②他大学で急性・重症患者看護専門看護師の教育を受けた者
③急性・重症患者看護専門看護師(*本学博士後期課程学生1名を含む)
④他分野の専門看護師(実習病院の慢性疾患看護専門看護師)
⑤本学クリティカルケア看護専門看護師教育コース在学2年目以上の学生
⑥本学クリティカルケア看護学領域の教員

V. CNS勉強会の内容

1. 専門看護師認定審査に向けた事例検討

勉強会では、主に専門看護師候補生が事例を提示し、他の参加者がそれに対する疑問や意見を述べ、その事例における実践や調整等の要点を議論するとともに、看護実績報告書に何をどのように記載すべきかを検討している。専門看護師認定審査では専門看護師としての実践、相談、調整、倫理調整の活動実績を様式が定められた看護実績報告書(A4版用紙1枚)として提出する。専門看護師として関わる事例は複雑な問題が多く、簡潔明瞭に記載するのは容易ではない。勉強会開始当初は事例を提示する際の書式を決めていなかったが、メンバーが初めて専門看護師認定審査を受験した際に、看護実績報告書の作成に苦労した経験から、看護実績報告書の様式を使用して、検討することとした。

具体的には、実践の事例として「心筋梗塞によって重症心不全となり、経皮的心肺補助装置や大動脈内バルーンポンピングを使用している患者の看護」、「薬物中毒によって急性腎不全と急性呼吸窮迫症候群となった患者の看護」、「心肺停止状態で搬送され、低酸素脳症となった患児の家族の看護」などが提示された。このような事例に対して、実践している看護が適切であるのか、最新のエビデンスにのっとった看護であるのかを検討した。それにより、専門看護師としての看護介入方法を再認識することができた。また、日ごろ実践している看護アセスメントや看護実践内容を文章としてまとめるのは難しいが、勉強会を重ねることで、介入に難渋した重症患者の経過を簡潔明瞭に伝える方法や、複雑な看護問題を明確にしたり、看護実践の根拠を示したりする方法を修得することもできた。

また、調整の事例として「集中治療室内の鎮静プロトコル作成と実施」、「病棟看護師への心臓手術患者看護の教育とマニュアルの整備」、「放射線科での心肺停止に備えた安全体制整備」、倫理調整の事例として「心疾患で術中死の確率が高い患者の手術実施を選択する患者家族の支援」、「機能障害を来す可能性がある外国人患者の治療方法の選択」などが提示された。これらに対して、医療者間の関係をシステムとして捉え、組織の文化も考慮したうえで、どのようにアプローチしたらよいのかを検討した。議論を通してその施設の特徴や問題点を明確にし、それを自らの施設に置き換えることで、改善点や介入方法の糸口の発見、組織における専門看護師の役割の再認識や活動方法の見直しにつながった。また、急性・重症患者看護専門看護師の活動においては、集中治療や救急を専門とする医師と患者の主治医との調整を必要とする場面が多い。しかし、議論する中でメンバーはそれぞれ医師とのコミュニケーションに苦労していると分かっ

た。医師とのよりよいコミュニケーション方法を検討し、問題の解決に向けた調整方法を議論することにより、介入方法が見つかるだけでなく、メンバーの悩みも共有できた。

専門看護師認定審査に提出する事例は、実践、相談、調整、倫理調整といった専門看護師の役割に関するものであり、それぞれの役割を明確に認識している必要がある。また、医学的な知識、看護理論、相談手法、倫理分析など、多岐にわたる知識が必要である。そのため、上述のような専門看護師としての視点や姿勢、介入方法、そして、実践内容を他者に伝えるための表現技術などを検討している。これらが専門看護師候補生にとっては認定審査の準備、在学生にとっては専門看護師の役割や実践の学習につながっている。

2.自己研鑽および情報交換

専門看護師としての活動への示唆を得るために、海外文献を用いた学習も行っている。初年度は、前述のように手探り状態の勉強会であったため、CNSの役割を学ぶことを目的として"The Clinical Nurse Specialist Role in Critical Care"¹⁾を講読した。これは、アメリカクリティカルケア看護学会が編集した教科書であり、概論と事例によってCNSの実践が具体的に紹介されている。毎月1章ずつ学習するよう計画を立て、各月の担当者が担当の章を翻訳して内容を紹介し、CNSの役割についてディスカッションした。内容は、クリティカルケア領域での「CNSの役割定義と実践、発展」、「CNSが実行している役割」、「CNSの役割：初心者から熟練者へ」、「病棟所属のCNS」、「CNSの医師とのコラボレーション」、「ケースマネージャーとしてのCNS」、「CNSの質の改良」などであった。これらの講読によって、専門看護師としての役割や活動方法の示唆を得ることができた。2年目以降は、実践に適応できる海外文献を講読している。

また、専門看護師も、専門看護師候補生も、活動時間の確保や活動成果の証明に苦慮している。専門看護師の役割についての周囲の認識もまだまだ低いため、勉強会ではメンバーが施設内で活動する際の悩みや専門看護師役割の広報の仕方なども話し合っている。メンバーがそれぞれの活動内容や方法を話すことで、他のメンバーの活動への示唆となり、気持ちを共有することができる。勉強会を通して自らの活動を振り返り、改善点を見つけることもできる。メンバーとの情報交換がそれぞれのモチベーションを高め、メンバー同士支えあって専門看護師としての活動ができていると考える。

VI. 今後の課題

毎年、数名の学生が本学クリティカルケア看護専門看護師教育コースを修了しており、今後も専門看護師認定審査を受けるメンバーは増えると予想される。先輩が後輩のアドバイザーとなり、専門看護師候補生が十分に準備して認定審査に臨めるよう勉強会を継続したいと考える。勉強会の継続には内容の改善が課題となる。メンバーが増えることで議論が効率的に行えない可能性もあり、議論の方法や内容を検討しながら実施する必要がある。また、勉強会のメンバーには、専門看護師自身の能力向上と中部地区のクリティカルケアの質向上に貢献することが期待されている。そのためには、メンバー間の情報共有や困難事例の相談、共同研究、セミナーの開催なども考えていきたい。



VII. 引用文献

- 1) Anna Gawlinski, Leslie S. Kern, Eds : The Clinical Nurse Specialist Role in Critical Care, W.B.Saunders Company, Philadelphia, 1994